

とちぎ協働デザインリーグは、協働のまちづくりの調査研究、支援・協力、政策提言等を行うシンクタンクです

2012.1

リーグファイル 06

〒320-0032 宇都宮市昭和 2-2-7
とちぎボランティアNPOセンター内
URL: <http://www.tochigi-tcdl.net>

とちぎ協働デザインリーグ
TOCHIGI COLLABORATION DESIGN LEAGUE



ボランティア・NPOが創る「時代」

とちぎ協働デザインリーグ理事長 藤本 信義

●未曾有の災害に見舞われてから9ヶ月、また新しい年を迎えたが、被災地の復興は遅々としている。福島県南相馬市の人口7万人のうち、元日を自宅で迎えることができなかった人は3万人との新聞報道が、広汎な復興の困難を象徴的に物語っていよう。1月時点では、南相馬市をはじめとする県外地域からの避難者約2,800人が、未だふるさとに戻れないまま、栃木県内での不慣れた生活を強いられている。

●当リーグは、県域の中間支援機能をもつ「とちぎボランティアNPOセンター（ぼ・ぼ・ら）」の運営主体として、震災対応施策に関わり、昨年8月に設置された「とちぎ暮らし応援会」の事務局を担っている。応援会は、県内のNPO等52団体の参加を得て、避難者の不自由、不安、孤立等を少しでも軽減するため、相談・交流・情報機能などを充実させる活動を展開している。

●しかし、おそらく10年単位の時を刻んで進められる復興の歩みを想うとき、辛苦を乗り越えたふるさとが、再び経済成長の波に乗って豊かな社会を享受するという図は、現実になるだろうか。子どもや孫の未来を想うからこそ、戻りたくとも戻れないふるさととは、原風景の中で育まれてきた多くの

絆とともに、衣食住の充たされた日々が繰り返される何気ない世界だ。哲学者の内山節に従えば、それは「無事」の暮らしが営まれる所なのだ。被災者は、経済的な繁栄をふるさとに求めることにも増して、「多くの絆」「衣食住の充たされた日々」の復活をどれほど強く望んでいることか。

●実は大震災を被る前から、私たちの社会は経済成長にブレーキがかかっていることを、否が応でも知らされてきた。成熟社会の中の貧困、社会保障制度の危機、国・自治体の財政難、新興国の経済成長による国際競争力の低下、そして世界に類を見ない超少子高齢化が、生産力の減退に大きく影響している。1950年代中期からの30年余り、東京オリンピック（1964）、大阪万博（1970）、沖縄海洋博（1975）などの国家プロジェクトとともに、バブル経済によるリゾートブームなどがかわって、我が国は右肩上がりの成長を続けた。やがて、元号が変わってバブルは弾け、95年には阪神淡路大震災を経験することになる。こうした推移は、オイルショックを除き我が国固有の出来事であったに違いないが、産業革命がもたらした「産業化社会」のパラダイムが、世界規模で揺らぐ時期に重なっていた。21世紀に入ると、セルジュ・ラトゥーシュは「経済成長なき社会発展は可能か」を問い、ロバート・D・パットナムは、コミュニティ再生のキーワードとして、社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）を詳細に検証した。我が国でも、多くの論者が「ポスト成長」社会への移行予測と、社会関係資本の計量化を試みている。また、ブータン国のGNP（国民総生産）ならぬGNH（国民総幸福度）が世に大きく採り上げられていることも、こうした傾向に符合するだろう。

●公共政策に造詣の深い広井良典は、成長の時代が終わったいま、「モノの豊かさ」から「関係性の豊かさ」へ時代を進めるべきと述べている。この関係性とは、単純に解釈すればヒト相互の絆を指すと思われ、今まさに震災後の重要な課題として提起されている。広く捉えれば、ボランティア・NPO、地域コミュニティ、行政、企業、市民団体等が、「新しい公共」の具体像である「多様な主体間の協働」を促進することも、関係性の豊かさを蓄積することにつながっていく。年が改まった今、「身の丈にあった経済」に関心を深め、ボランティア・NPOの存在意義が深まる時代を、少しずつ創り出すことに寄与できればと願っている。

鹿屋市串良町柳谷集落「やねだん」のまちづくりから学ぶこと

橋立達夫／とちぎ協働デザインリーグ理事 作新学院大学経営学部教授

◆はじめに

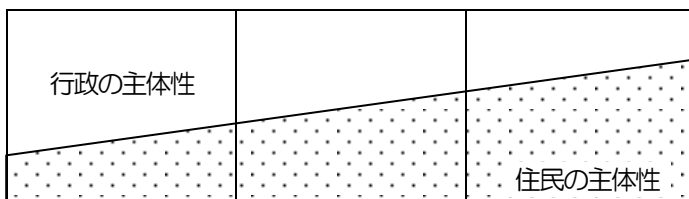
住民主体の地域づくりには進化の過程がある。そしてその究極の姿は、住民による自治である。今回は、その究極の姿を実現しているまちづくりの事例を紹介したい。「やねだん」。鹿児島県鹿屋市串良町柳谷集落である。「やねだん」とは、柳谷を鹿児島弁で表した集落の愛称である。『住民にボーナスが出る集落』ということで広く知られ、数々の表彰を受けている地域であるが、その活動はさらに大きく進化しながら今日も続いている。

◆住民主体の地域づくりの進化

住民主体の地域づくりは、住民参加から参画・協働へと進化してきたが、今、「市民自治」への道が見えてきている。

住民主体の地域づくりの進化

住民参加 ⇒ 参画協働 ⇒ 市民自治



まちづくりへの住民の関わり方として最初に現れたのは「**住民参加**」であった。行政が住民の意見を聞きながら施策を進めるという考え方である。地方自治法にも、住民参加の必要性が謳われている。しかし1960年代後半に芽生えた「住民参加」は、やがて行政の中に取り込まれてしまい形骸化していった。町内会長や商工会長など宛職により行政に選ばれた住民が参加して行われる会議は、行政が予め描いたシナリオ通りに進められ、住民の意見は言い放し、聞き放し終わるといのが、通常姿になってしまったのである。このような問題を解消するために次に生まれたのが、計画段階から住民が加わって事業案を考え、その実現に向けて協力して働くという「**参画協働**」である。ワークショップ型会議の手法の普及定着と相まって、今、全国に参画協働の活動が広がっている。そして参画協働の先にあるのは、住民が行政の助けを借りなくても、できることは自分たちで自主的に行うという、

「**市民自治**」の取組みである。参画協働の活動の多くが行政の呼びかけによって行われ、とくに資金面で行政に頼る場合が多いのに対して、自治はあくまで住民が中心に地域の将来を考え、自らの資源を用いて活動するという姿である。究極の住民主体の地域づくりという理由はここにある。

◆やねだんの事業

やねだんは、人口約300人、その4割が高齢者という、高齢過疎化が進む全国の農山村と同じような地域であった。その地域が15年前、一人の地元出身の公民館長を迎えたことから次第に変貌し、今や、「地域再生のお手本」として全国に知られるところとなった。

その様子を、地元のテレビ局は次のように紹介し、特集番組を放送した。

「鹿児島県鹿屋市の柳谷集落、愛称『やねだん』人口300人、うち65歳以上が4割。どこにでもあるようなさびれゆく過疎高齢化の集落でした。ところが10年ほどで“地域再生のお手本”として全国から注目される集落に変貌したのです。『やねだん』が目指したのは、“行政に頼らない地域再生”。集落で労力や経験を提供しあって、独自の商品開発で自主財源を増やし、福祉や教育を自ら充実させていきました。そして、自主財源が増えた結果、集落の全世帯にボーナスが配れるほどに！逆境を逆手にとる愉快的発想、したたかなビジネス感覚、人の和の底力、リーダーの苦勞と献身、そして住民の笑顔。この番組は、地方のとある小さな集落が再生を果たした12年の記録です。」(NBC 南日本放送 2008年5月29日放送『やねだん～人口300人 ボーナスの出る集落』より)

なお、この放送はDVDに収録され、現在も販売されているので、是非入手して参照されたい。

やねだんがこれまで行ってきた事業は以下のようなものである。

- ・荒れていた町有地（工場跡地）の整備

住民自らが計画し、整地作業から始めて数々の建造物も竣工させ、地域のシンボルである「わくわく運動遊園」として完成させた。
- ・さつまいもの生産・販売

地域づくりの活動資金を得るため、遊休農地を使ってサツマイモ栽培を行い、販売。
- ・寺子屋 学習塾を運営

農村地域の子供たちの学業におけるハンデを埋めるため、元教員の住民らの指導で無料の学習塾
- ・高齢者宅の緊急警報装置設置

一人暮らしの高齢者が、安心して暮らせるよう、対象者の家に緊急警報装置を設置。
- ・毎日の無線放送

集落のコミュニケーションを強めるため、毎朝定時に公民館長が防災無線を通して、朝の挨拶と前日の活動報告、当日の活動予定等を放送。
- ・土着菌の開発・製造・販売

地域産の土壌菌を米ぬかと黒糖を用いて培養し、頒布している。畜産公害対策土壌改良に多大な効果を生むとともに、集落の主力商品として利益を上げている。
- ・焼酎製造販売

上記の栽培されたサツマイモを原料として地域ブランドの焼酎「やねだん」を製造・販売。
- ・食堂の運営

土着菌を用いた畑で有機栽培された野菜等を用いて、見学者等に食事を提供する食堂を開設・運営。
- ・ふるさと宅配便

有機栽培の野菜、焼酎、陶芸家制作の陶器などの詰め合わせを、「やねだんからの贈りもの」として販売。木箱や包装の風呂敷まで、住民が制作。
- ・母の日・父の日・敬老の日の放送

毎年、母の日・父の日・敬老の日には、朝の禎司放送の時間に、地域外に住む子どもたちからの手紙を、地元の高校生が代読。地域の人たちの心の中に温かい絆が生まれる時間である。
- ・住民へのボーナス お年寄りに感謝状

様々な事業の剰余金が貯まったのを機に各戸 1 万円のボーナスを支給。お年寄りには手書きの感謝状を贈呈。
- ・空家の活用

集落の空き家を清掃整備して、「迎賓館」と名付け、全国から芸術家限定の住民誘致を行っている。
- ・陶芸教室など

誘致に応じて定住した陶芸家が主催する陶芸教室。そのほか、画家が描く住民の似顔絵、写真家が撮る住民全員の写真展など、移住してきた芸術家を核に地域の文化を高める活動が幅広く行われている。
- ・芸術祭

やねだんの地域づくりに共鳴した芸術家が集まり、地域内で創作活動を行い、その成果を集落内で発表。
- ・シニアカー配布

2度目のボーナスを住民がもっと地域の役に立つことや、みんなで楽しめることに使ってほしいと辞退したことから、使い道を模索。初年度は、足の不自由な高齢者全員にシニアカーを配布した。その後、集落メンバーの旅行・視察費用などにも用いられている。
- ・まちづくりリーダー塾

やねだんのまちづくりの名声を頼って多くに視察者が訪れる。地域では、視察を有料で受け入れているが、さらに合宿形式のまちづくりリーダー塾を毎年開催し、人材育成を行っている。

◆やねだんの優れたところ

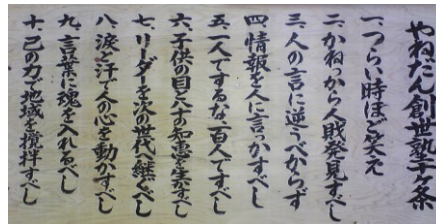
さて、やねだんの優れているところは、どんな点であろうか。以下、考えつくままに列挙してみよう。

・行政の力に頼らない	本当に自分たちのやりたいことをやろうと思ったら、行政に頼らず財源から自分たちで確保して行わなければならないことに気付き、実践したこと。
・人海戦術	何をやるにも集落の住民総出の人海戦術で行うという活動が定着していること。当初は批判するばかりで活動に参加しない人もいたが、リーダーが率先して活動し、成果を上げることで、信頼が広がった。
・住民の中のプロの力を引き出す	住民の力を、単なる単純作業にとどめず、それぞれの経験や技を生かしたプロとしての力を引き出していること。
・創意工夫	常に創意工夫を忘れず、自分たちが考えたことが実現する経験を積むことにより、「次に何をやろうか」と住民が考える状況を作り出していること。
・増殖する活動	次々と新しい活動を展開し、進化を続けていること。活動の広がりはずでにリーダーの予想を超えるところまで展開している。
・福祉の視点・いのちを見つめる視点	高齢者や子供たちを大切にしようとする精神が、随所に満ちていること。
・ビジネス感覚	活動を単なるボランティア活動に終わらせず、最初からコミュニティビジネスとして運営するという確信に裏付けられていること。
・全国モデル	全国のお手本となっていることを自覚し、それを資源として視察研修とまちづくりリーダー塾を行うなど、成果の普及を目指していること。
・命令せず感動でつなぐ仲間意識	住民に活動を強制することなく、感動を共有することで人が動く状況を創り出してきたこと。
・世代を超えるつながり・誕生	子供からお年寄りまで、世代間のコミュニケーションと理解がいきわたっていること。
・人口増	高齢過疎化が進んできた集落に1ターン・Uターン者が定住し始め、ついに人口がプラスに転じたこと。・住民・子どもが生き生きしている 住民一人ひとりの目が輝き、特に子供たちが生き生きとしていること。
・お年寄りの逝き方	生涯現役で活躍し、他の住民に慕われ、惜しまれながら亡くなるという、理想的とも思える高齢者の生き様、逝き様を実現していること。
・住民の意識向上	2回目のボーナスを返上するまでになった住民の意識向上。
・自治の実践	住民主体の地域づくりの究極の姿である自治をまさに実現していること。

◆リーダー豊重哲郎さんの力

最後に、地域のリーダーとしての公民館長、豊重哲郎さんの力について考えてみよう。豊重さんは、集落の秀才として、難関を突破し高卒で東京の銀行に就職した。しかし学歴社会の壁に阻まれ失意のうちに帰郷。その後、自ら起業して事業を成功させる傍ら、中学校のバレーボールの監督として活躍するなど、地歩を築いてきた。そして51歳で従来たらいまわしの慣習があった公民館長に就任。文字通りのまちづくりリーダーとして、今日まで地域づくりをけん引してこられた。

リーダーとしての豊重さんのすごさを上げると以下のような点が考えられる。



- ・ 率先して動く 様々な困難を伴う活動を、常に先頭に立って自ら実践してきたこと。
- ・ 命令しない 周囲に活動を強制せず、住民自らの意志で活動に参加するまで待つ忍耐力。
- ・ 挫折を乗り越えた力 自らの若い時の挫折感をばねに常に前を向いて活動する精神力。
- ・ 共感を得られる哲学 人に対する優しさに裏打ちされた人間としての大きさと、行動哲学。とくに「地域再生の決め手は文化の向上にある」と見定める眼は卓越している。右図は、豊重さんの哲学が顕れているやねだんの活動憲章である。

- ・ 毎日の継続（朝の放送） 15年間、欠かさずに行ってきた活動。
- ・ 感動と涙 人々に感動を提供し、自らも涙を流しながら活動する姿。
- ・ 病気を克服 公民館長就任後に大病を患うがそれも乗り越えて、今日も先頭に立って活動されている。使命があるから生かされているということの自覚。
- ・ 忍耐と勇氣 当初の周囲の無理解など逆境にあっても、いつか分かってもらえるという信念と勇氣によって耐え忍び、決して人の批判をすることなく道を切り開いてきたこと。
- ・ 優しいまなざし 高齢者や子供たち、そして住民全体、さらに訪問者にまで注がれる優しいまなざし。
- ・ 人を観る眼 迎賓館への在住者を選ぶときに発揮された人を観る確かな目
- ・ 創造力と湧き出るアイデア 次々と事業のアイデアを考え出す創造力。母の日などの放送や住民にボーナスを配るなどという、人の心を打つ発想がどこから生まれてくるのか、まさに驚異的な想像力である。
- ・ マネジメント力 コミュニティビジネスとして事業を運営するマネジメント力
- ・ 活動の記録を残す 自分の後に続き次世代をリードする人たちのために、これまで歩んできた活動の道筋を記録として残す
- ・ 内助の功 これほどまでに苛烈な活動を続けてくれば、家庭を顧みることが困難であったと思われるが、奥様の絶大な支持と気配りを得られていること。

◆終わりに

私は大学で「まちづくり論」の講義を10年以上続けてきたが、半期15回の講義も、わずか1時間に凝縮されたやねだんの活動DVDにかなわない気がしている。学生たちが映像に見入る眼、そこで得る感動は、まぎれもない本物である。そして言葉では語りつくせない地域社会の将来ビジョンが提示されることにより、これから地域づくりに取組もうとする若者に、明らかな指針をもたらすからである。

以上でみてきたように、「やねだん」は、まさに全国の地域再生のお手本として、今も進化し続けている。このような地域社会を作り上げるのは一朝一夕にできることではないが、

それでも活動開始以来わずか15年でここまでの成果を上げることができたことに注目していただきたい。皆さんの地域でも、今から始めればご自分の世代で成果を得ることができる。しかも「やねだん」という先達が常に見えているのであるから、後発の利益を期待することができる。豊重哲郎さんは偉大なリーダーであるが、お会いすればごく普通の農村のおじさんでもある。それが皆さんの明日の姿になることを期待して筆を置きたい。もちろん私も「やねだん」に負けないまちづくり論を展開して行くつもりである。

【書評】揺らぐ子育て基盤 少子化社会の現状と困難

松田茂樹 汐見和恵 品田知美 末盛慶 勁草書房 2010年
石原栄子/とちぎ協働デザインリーグ理事、作新学院大学女子短期大学部教授



少子化は近年の社会状況を端的に表すキーワードであり、国の未来像を描く上でもその対策が急がれる課題である。子育て支援の論議が重ねられ、さまざまな支援策が実行されているが、期待される合計特殊出生率の回復には至っていない。若い世代が、安心して子どもを産み育てられる社会ではないことがその要因としてあげられる。本書はさまざまな調査研究の結果を駆使しながらこの問題を追及している。

第Ⅰ部「子育て・保育のいま」では、乳幼児の子育ての現状や変化が示されている。親の育て方と子どもの育ちの関連、乳幼児の子育てと親の悩み・不安、大都市と地方都市・町村など居住環境による子育ての違いなどが明らかにされている。第Ⅱ部「社会関係資本と社会的支援」では、社会や地域の支えに目を向け、その実態と課題が述べられている。親子に対してサポートを行う育児ネットワークおよびその供給源である地域社会の問題が取り上げられ、子育て支援施設が提供しているサービスが保護者のニーズを満たしていない現状が明示されている。

第Ⅲ部「職業生活と子育て」では、子育てを支える職業生

目次

序章	子育て基盤に目を向ける
第Ⅰ部	子育て・保育のいま
第1章	親の育てかたと子どもの育ち
第2章	乳幼児の子育てと親の悩み・不安——子育てへの社会的支援の質と量への期待
第3章	居住環境と親子生活
第Ⅱ部	社会関係資本と社会的支援
第4章	子育てを支える社会関係資本
第5章	子どもの育ちと親を支える社会的支援の意味
第Ⅲ部	職業生活と子育て
第6章	労働世界の変動と男性の家族生活への関わり——労働の過剰と脱標準化が家族にもたらすもの
第7章	職場環境と男性のワーク・ライフ・バランス——ジェンダー秩序が揺れ動く条件
終章	子育てを支える家庭の経済基盤

活や経済基盤の現状と課題がまとめられている。現代家族における職業生活と夫婦関係の関連を、データを用いて明らかにし、職業環境が父親の「脱仕事志向」や「育児遂行」に及ぼす影響を分析し、さらに子育て家庭の経済状況に目を向け、子育てを安寧に行うためには安定した経済基盤が重要であることが述べられている。

子育ての責任はあたかも親のみにあるかのごとく語られるが、親としての育ちを支える社会が失われてきたことを見逃してはならない。地域は個々に消費する家の集合体になり、共同で生産活動をしていたかつての機能を失っている。そこでの子育ては親の孤独な作業となり、負担感のみが蓄積している。しかし、子育てはもうひとつの人生を生きること、未来へのメッセージを託すことであり、異文化としての子どもを知ることは人生を豊かに生きることにつながるのである。子どもや子育て期の親のみならず、すべての世代が暮らしやすい社会にしていくためには、地域の暮らしの再構築が必要であり、そこに協働が大きな力を発揮するものと考えられる。時代の課題を見直す手がかりとなる1冊である。